

特別支援学校教師がもつ自立活動における重度・重複障害児の自立と主体性のイメージ

学校教育専攻
特別支援教育コース
油目 未帆

I 問題

重度・重複障害児とは、特殊教育の改善に関する調査研究会(1975)の「重度・重複障害児に対する学校教育の在り方について」によると、学校教育法施行令第22条の3に規定する障害をあわせ有する他に、発達の側面から見て「精神発達の遅れが著しく、ほとんど言語を持たず、自他の意思の交換及び環境への適応が著しく困難であって、日常生活において常時介護を必要とする程度」の者などとされている。肢体不自由及び病弱の特別支援学校に在籍している重度・重複障害児は、大島(1971)の分類では、IQ35以下で寝たきり又は座位が可能なレベルの子どもたちである。

教師が重度・重複障害児の教育の中心となる自立活動の指導を行う際、自立の姿や主体的に取り組む姿をどのようにイメージし、個の目標をはじめ、指導計画立案や授業実施の際の配慮・工夫をどのように行っているかを明らかにし、自立を目指し、より主体的に取り組むべき自立活動の在り方を検討することは意義あることと考える。

II 目的

特別支援学校の自立活動において、重度・重複障害児が自立を目指し、主体的に取り組める自立活動の指導について検討するため、以下の点を明らかにする。

1 担当教師が重度・重複障害児の目指すべ

き自立の姿をどのようにイメージし、目標設定をしているのか

2 担当教師が重度・重複障害児の主体的に自立活動に取り組む姿をどのようにイメージしているのか

3 重度・重複障害児が自立を目指し、主体的に取り組める題材設定、授業実施の際の配慮・工夫について

III 方法

1 研究 I

1) 予備調査

(1) 目的

本調査で用いる質問項目の確定のために、暫定質問項目を作成し、内容的妥当性を検討した。

(2) 調査方法

現職派遣院生等への面接の結果と大分県立鶴見養護学校(1997)等を参考にして作成した暫定質問項目について回答してもらい修正するとともに、近隣の特別支援学校教師に修正した項目の表記上の問題や内容が分かりにくい項目を指摘してもらった。

2) 本調査

(1) 目的

担当教師がもつ自立活動における重度・重複障害児の自立の姿と主体的に自立活動に取り組む姿のイメージ、主体的に取り組むための授業実施の配慮・工夫を明らかにする。

(2) 方法

全国の特別支援学校のホームページ上で自立活動を主とする課程があるとしていた、179校の各学部担当教師に郵送による質問紙調査を行った。

(3) 調査内容

予備調査で確定した以下の質問項目。

- ① 重度・重複障害児の「自立の姿」についてのイメージの有無及び具体的にイメージした姿
- ② 重度・重複障害児の「主体的に自立活動に取り組む姿」のイメージの有無及び具体的にイメージした姿
- ③ 自立活動において重度・重複障害児が主体的に取り組むための授業における配慮・工夫について

2 研究Ⅱ

1) 目的

自立の姿のイメージと自立活動の授業との関連、授業実施の際の主体的に取り組むための配慮・工夫を明らかにする。

2) 方法

自立の姿、主体的な姿を具体的にイメージしていたB特別支援学校教員に半構造化面接を行った。

3) 調査内容

- (1) 授業と「自立の姿」の関連付け
- (2) 「自立の姿」のイメージの見通し
- (3) 授業において、主体的に取り組むための配慮・工夫

Ⅳ 結果及び考察

1 研究Ⅰ

1) 回収率

179校中に調査協力依頼を行い、81校から協力可との回答を得た。実際に81校中73校(90.1%)206名から回答があった。

2) 結果及び考察

(1) 「自立の姿」のイメージ

小学部57名(81.4%)、中学部52名(82.5%)、高等部54名(85.7%)がイメージをもっていると回答した。具体的な姿として、「教師からの働きかけを受け入れ、自己の感情の表現を表情や目・口の動きで表出できる」、「定期的な帰省ができ、好きなことを時々楽しむことができる」等があげられた。また、「自立の姿」を特別支援学校高等部卒業後の姿としてとらえている場合が多かった。

(2) 「主体的に取り組む姿」のイメージ

小学部59名(88.1%)、中学部52名(82.5%)、高等部51名(86.4%)がもっていると回答した。具体的なイメージとして、「自分の意思を目の動きや表情で伝える」等があげられた。

(3) 授業における配慮・工夫

教材・教具の工夫に関する内容が多くあげられた。また、その他に、子どもの出すサインの見とりに関する内容、言葉かけなど教師の働きかけに関する内容があげられた。

2 研究Ⅱ

研究Ⅱでは、B校を訪問し、インタビュー調査を実施した。「自立の姿」と自立活動の指導の授業を関連させ、授業に取り組んでいることが明らかとなった。具体的には、その子どもが興味をもっている歩行器を遠くに置いて、寝返り、ひじばいで動きを引き出すということをしていた。

また、「自立の姿」のイメージの見通しについて、高等部卒業後はイメージしにくい、何となくでもイメージをもって指導していることが分かった。

指 導 笠原 芳隆